

平成二十八年年度 博士(文学) 学位請求論文 要旨

近世神道考証学の研究

吉川 竜実

## 『近世神宮考証学の研究』要旨

吉川 竜 実

本稿においては、先ず第一編で、平安初期の延暦儀式帳の撰進を一つの大きな起点として、凡そ千二百年以上にわたって連綿と培われてきた、神宮が拠って立つところの学問である神宮根拠の学、換言すれば神宮祭祀の永遠性と厳正とを護持する護教学の「神宮学」について、神代から明治期に至る歴史の流れとその特徴を、各時代に著された神宮古典の系譜に基づき明らかにする。

次に第二編では、江戸後期に活躍した内宮禰宜の中川経雅について、先学から学び得た彼の伝記研究を基に筆者の見解も加えながら学問を中心とした経雅の略歴を披瀝し、『大神宮儀式解』執筆の動機や成立時期に関し改めて検討して、経雅が神宮学の本居宣長の国学を積極的に採り入れて近世「神宮考証学」を樹立したことを考察する。また宣長の『古事記傳』との比較より導き出された『儀式解』の特徴や記述法等を論じ、同書が後進に与えた影響にも言及する。続いて経雅が親愛なる子孫を慈しんで自らが持てる全ての学識と経験とを傾注して記された教訓書であり遺言書でもある『慈斎真語』について、その詳しい成立事情や執筆に至る具体的な動機や想い、或いはその内容構成や執筆理念等を明白にすべく考証を施し、併せて祠官心得にはじまる修身訓や齊家論、また処世術や学問教育法・人生観等、彼の全人格的な赤裸々な姿を彷彿とさせる『慈斎真語』の有する真価を究明して経雅の真の人物像に迫った。このような経雅の樹立した近世神宮考証学は、やがて同宮禰宜の藺田守良によつて継承され、その影響は内宮から外宮へと及ぼされることとなり、外宮権禰宜の足代弘訓や橋村正兌といった人物が発展させ、幕末に御巫清直が登場して近世神宮考証学を大成する。

そして第三編では、その大成者である清直について論評すべく彼の八十三年にわたる生涯を四つに区分して清直の経歴を辿ることとし、各時期における彼の主要な齋庭奉仕と学問傾向を論じて清直の神宮考証学の特徴を考究し、従来の清直研究で希薄であった思想面に着目して、彼の考証基準となった思想である

「神朝廷論」を検証する。続いて清直の神宮古伝研究の粹を集めたと見られる『神朝尚史』について、その構成や内容をはじめ考証理念に関し論及し、明治二十二年の第五十六回神宮式年遷宮が『神朝尚史』編纂の大きな契機となっていることを指摘した上で、その成立事情を明白にし平田篤胤の影響についても論考する。更に年間千五百回ともいわれる神宮恒例祭の約半分を占め、且つ外宮祭祀の生命線とされる常典御饌の総合的な研究の中で、特にその高みにまでのぼった清直の『御饌殿事類鈔』を通して、外宮の御鎮座と御饌殿との関係をはじめ殿舎及び神座（装束）・神饌、或いは行事次第の変遷と総御饌との関連を考察すると共に、また実際に奏上されてきた祝詞と祭祀空間の分析により常典御饌の意義を鮮明にすることを試みた。

最後に補論として、清直の考証に基づく神宮神事絵画について紹介し、本稿の内容を補完することに充てている。